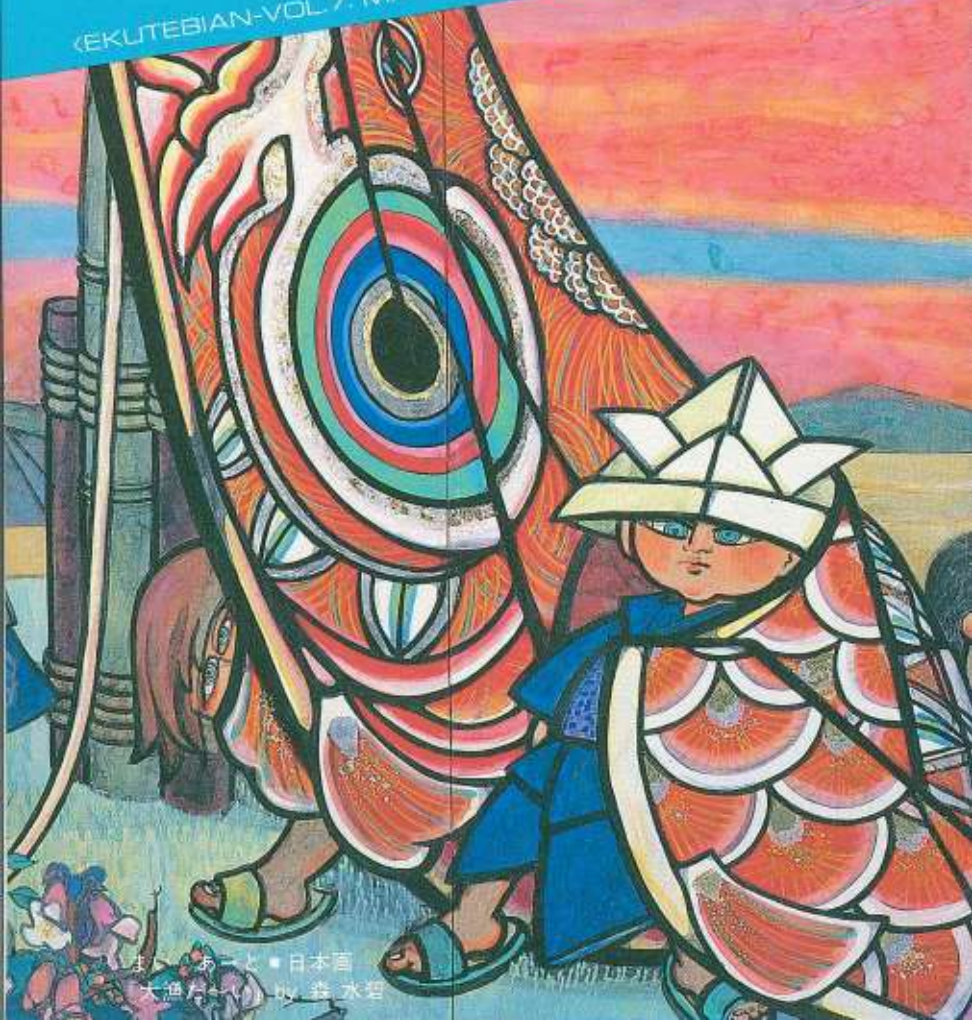
月刊
えくてびあん
立川と語ろう　立川に生きよう
5
〈EKUTEBIAN-VOL.7. MAY 1990-EKUTEBIAN〉
あーと■日本画

WASSHOii 輪一緒！

わっしょい！ ひとが生きてゆく、ひとが集まる、そこに夢がうまれる。それは「皆んなの」ゆめだ。障害のある人も、ない人も、いのち燃やした春の一日。ノーマライゼイションに裏打ちされたこの日、作詞も作曲も全てオリジナルで市民会館のステージが沸騰した、去年につづく2ndコンサート。咲け、咲け、輪一緒！

「マギーおばさんの素敵ないす」の一場面

小川良さん（下）と
実行委員長の野口俊彦くん（左下）

中原　太くんは「大きな翼の鳥たちよ」をゆったりと歌う

朗々と歌いつづけた好村好太くん「おれは生れた」

「この街で生きたい」内田哲郎くん

「海の向うの街から」平石和之くん

「ジュゴン音頭」は村山養護学校から

「時速ちょうちょのスピードで」高田千恵子さん、愛媛の靖子ちゃんと

城北養護学校の皆さんで「未来列車」

ことわざ問答 ②

漢字一字挿入せよ

▼選んで●をつかむ

▼娘みるより●をみよ

5月13日(日)
「すわっ祭 音楽会」
会場：中央公民館
時間：13時～16時
※詳しくは ☎24－2773 岩崎さんまで

5月27日(日)
ゴミ減量化キャンペーンの一環
「ゴミ0運動」
集合：各地域にて 午前8:00開始
※詳しくは ☎23－2111 内線518 大貫さんまで

ぐるり立川

「川を渡るには、橋を架けねばならない・・・」とは、毛沢東語録の一節だが、立川と日野の間を流れる多摩川に新しく架けられた立日橋を渡ると、なるほどと妙に納得した。

古来から、川のあるところ文明が発祥したとチグリス、ユーフラテス川の例を引くまでもなく、私たちは学校で習ったものだ。だが、今、川のあるところ、交通渋滞がおこるとあっては、川もジャマものになる。日野橋の交差点は五差路になっていて、立川市役所から北口へと続く道は、慢性的な渋滞になる。その交通渋滞の解消をねらってつくられたのが立日橋だ。

まだ、一車線ずつで工事は完了していないが、橋の両わきに優美な姿で水銀灯があかりを灯す。日野橋の照明が、カブト虫の角のようであるのに対し、立日橋のそれは蝶のように華やかで、夜ともなると蝶の乱舞が繰り広げられる。

川を渡るには、まず、橋を架ける。その昔、サイモント&ガーファンクルは、「明日に架ける橋」を歌ったが、私たちの明日は、どうなるか。立日橋の工事はまだ完了していない。（東島弘子）

あなたの眼に立川が読めてますか？

錦町公民館で「みんなで語ろう今昔物語」の集会が設けられ、錦町という身近かな「街の歴史」を探ろうと近隣の人びとでにぎわった。立川の各町で、こういう「街の息づかい」が感じられる話合いの場がもたれたら、明日の立川を「読む」うえにどんなに役立ってくれることだろうか。

タテマエの歴史ではなく、自分の住む街の本当の姿をとらえようと『みんなで語ろう今昔物語』が開かれ、今回は「錦町歴史・自然散策路を語る」集会（3月30日⊙市民のつどい実行委員会の主催）であった。

司会に木宮絹枝さん、発言者として小川孝さん、柳内正行さん、中島吉広さん、助言者として地元で長く学校長をつとめ、社会教育委員もつとめてきた松村収治さんをむかえておこなわれた。

会の進行は、発言者からポイントになる25個所の解説あるいは最近あきらかになった事実について語られていく。

熱心に解説をほどこす小川孝さん、後方に松村さん

・立川段丘崖と矢川・金堂部落・第六天神社・旧甲州道中・下和田地蔵堂・甲州道中道標と市川水車・立川公園・根川緑道・日野渡しの碑・馬頭観世音菩薩碑・日野橋と丸芝館・根川・内藤水車・芝中延命地蔵堂・ジブチパブチ・見殺坂・雨成り淵・大正天皇御野立場碑・緑川・青柳・石田・庚申塔・矢川弁財天・矢川自然環境保全地域・箕輪山光西寺・向郷遺跡。

これらの内、どのくらいの知識を持ちあわせているだろうか。この中には現存しないものもあり、現存するものと区別されながら、克明に地図に示された。本誌でその地図をスペースの関係で掲載できないのは残念だが、会場では地図上での解説が理解を助けていたうえ、会場後方に写真掲示がしてあり、地図との照合によって理解を深めていたようだ。

そもそも「錦町」の名命は昭和十七年だという解説もあった。「大正天皇御野立場碑」の頃で、天皇は府立二中（現立川高校）の仮御座所を出発、錦旗先導でこの地に至り大演習をご覧になられた御野立場で、町名も下和田・芝中地域を通過された錦の御旗にちなんでつけられたという。

また錦町は西南方をのぞくと「碁盤の目」のように区画整理がゆき届いている。その理由についても明らかにされ、集会は講義を聞くだけでなく意見交換も活発だった。

写真を見ながら「歴史」を確認する参加者

表紙は語る

まい あーと■日本画
「大漁だーい」by 森 水碧

5月のこえを聞く頃になると、軒先から思い思いの鯉幟が顔を覗かせる。床の間には凛しく鎧兜がすえられ、男の子が勇ましくあれと、それぞれがとくに願う月でもあります。

さて、今月の表紙を飾ってくださったのは、創作画人協会会員の森水碧さん。大きな瞳と力強く柔らかいタッチは、とても親近感をあたえてくれる。

「日本画をはじめて20年ほどになりますか。それ以前は油絵を描いていました。なにか、日本人のもっている気質・気持というものと、日本画の持っている材質とがとてもマッチして、自然に日本画の世界にはいっていきました。日本画をやっていた、両親の影響ももちろん大きいとは思います。」

二科展入選をはじめ、創展入選文部大臣奨励賞など、多くの評価を得ている。筆をとるときにいつも、画面に登場する人物の、微妙に揺れるそれぞれの気持になり、心運んで描いているという森さん。

真如苑だより

「美しい五月の巴里」という旧いシャンソンがあります。マロニエがアヴェニューに咲き誇り、頬にやさしいあのそよ風。シャンソンに歌われている「頬にやさしい」そよ風は、この立川にも。

五月の真如苑へ、どうぞ。

■日時　5月15日(火)　午後2時～4時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■立川市民（成人）に限らせて頂きます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

ことわざ問答 答

選んで粕をつかむ
あまり選り好みをしすぎるとかえって、わるいものを摑むことになるたとえ。

娘みるより親をみよ
花嫁候補を見定めるには、当の娘さんをみるよりも、母親をみて判断したほうがよい。

？立川クイズ

いよいよ、花満開の季節をむかえました。

立川の木は「けやき」、そして立川の花は「こぶし」であることは、よく知られております。

この他に、6種類が「市の花」として定められております。次にあげるなかで、市の花と関係ないもの一種類は何でしょうか。

問　すみれ。さくら。サルビア。コスモス。さざんか。すいせん。

【4月号の答】先月号では、立川の方言の実例をあげてみました。設問は3月号をご覧ください。

「井上さんの家では、やのあさって（3日後）の諏訪神社のお祭りに、一家そろってお参りに行くそうだ、あんたも一緒に行こうといわれたけれど私はどうしようかと考えているところだけど（「立川の方言」鈴木為佐生著・立川市教育委員会発行より）

立川・トピックス

新たに彫刻が出来た

自然の大いなる息吹とともに、地域文化キーステーションとも云うべき公民館に、シンボリックなモニュメントが2基、このほど完成した。

幸町2丁目立川八小隣りに、幸公民館が新たに健てられ、高松町に住む銅板造形家・赤川政由さんによる「大きなけやき」と題された作品が置かれ、地域に暖かな笑みをあたえた。

また、柴崎町1丁目にある中央公民館には、ステンレスとブロンズの素材を組み合わせ、未来的な香りする「未来への窓―夢」（中嶋一雄・作）がお目見えした。

市庁舎にもブロンズ像

東京立川ロータリークラブ（会長・斉藤克己氏）は設立されて今年が三十周年。

これを記念して、立川市にブロンズ像が寄贈されることになった。除幕式は4月10日、青木市長と製作者の笹戸千津子さんによっておこなわれ、ロータリークラブ関係者がつめかけるなか、拍手のうちにブロンズ像「長衣の女」がおめみえ。

青木市長は「こんなに素晴らしい像を本当にありがとう。市民と一緒に永く愛でていきたい」と謝辞を述べた。

東風

だれが「健常」者なのであろうか★十数年まえの奈良で「わた帽子コンサート」がおこなわれ、全国に拡がりをみせたが、わが立川では障害者という枠を意識することなく、障害のある人も、そうでない人も、創造力に富むハツラツとした生活を送ることが出来るよう、そのきっかけになるようにと「輪一緒」が企画され、今年は第二回目のコンサートが実施された★実行委員長の野口俊彦さんは現代の難病のひとつといわれている進行性筋無力症で、くるま椅子の生活。私たちのインタビューに応じてくれたり、輪一緒の開会挨拶を聞いていると、野口さんの聡明で快活な性格が伝わってくるのだった。彼の口から、まるで他人ごとのように「毎年、確実に進行しているんですよね」という言葉を聞いたときには、思わずぞッとしたものだ。今日の命を精一杯いきる人ほど、この大切な人生訓を実践しているのではないだろうか★再び、健常者とは誰を指すのであろうか。五体満足な人間が「健常」なのであろうか。戦争も犯罪も、そのほとんどが「健常」者の手によってくだされてきた★ちなみに辞書を繰ってみた。すると「健常」も「健常者」も字引きには載っていない。広辞苑をはじめいくつかにあたってみたが、ない。どこの国の言葉なのであろうか★菖蒲湯に　後生大事の　えくてびあん。

（編集）石塚敦美　小川知子　神山清子　隅川理　山田恵子　中村裕里　半沢正弘　原田悦子
（写真）天野武男　板橋一明　吉田義治　スタジオ269　柿川一巳　本多修

月刊えくてびあん　第70号
平成二年五月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市富士見町2-20-15
パークビューハイツ501〒190
電話　○四二五(28)○○八二
FAX　○四二五(28)一二九七
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　㈱大廣社

第11回

我家は3代目

老舗といい暖簾の重みという。それも3代つづけば語り尽くせない物語があろう。この街にも沈黙して静かなる物語のかずかずがそここに隠されている。

日常の用を供して半世紀

百貨店ヤジマ（高松2丁目）

昨年、創業五十周年を記念をしたばかり。日用品を商って、実に半世紀を越えた。初代・矢嶋直吉さんの頃は、高松町界隈はほとんど畑で、成り物を事のついでに売っていた。お客さんから乞われるままに、荒物雑貨も置くようになり今日では4千くらいのアイテムを並べるまでに着実な成長をみる。

初代が使用した農具が大切に保存されている。

周辺の都市化に歩調をあわせて改装かさね、近代的な明るい店舗に。

総出で店を盛り上げる矢嶋さんご一家。（右から）ご主人の通雄さん、手前がお母さんのヤマさん、4代目を継ぐ幸夫さん、従兄弟の田中久さん、幸夫さんの奥さんは佳加さん、通雄さんの奥さんで和子さんの和気あいあい。